

岩生成一著

朱印船貿易史の研究

林屋 辰三郎

京都に夏の季節が訪れてくることに、わたくしはとおく三〇〇年前の朱印船貿易のことを、一種の憧憬をもつておもしろいおこずのがつねである。それは日本の三大祭とうたわれ、京都の人々のこの上ない誇としてゐる祇園祭の鉾町には、あの天空にそびえる山鉾の鉾柱が、実は御朱印船のメンマストを転用したものだといふ伝説があるからである。この伝説はもとより一個の伝説で、なんの証拠のある話ではない。京都の朱印船貿易家といへば、茶屋や角倉らであろうが、彼らが特に祇園祭に協力したという史料もあるわけでもなさそうである。しかしそれにもかかわらず、この伝説は、鎖国のころからしだいに華麗さを加えた祇園祭について、おそらくは鎖国により意気のはげ口を失つた町衆たちが、この祭のなかにそのうさを晴らしたのでもあろうかという連想に、びつたりあてはまるような真実味をもつて語りつがれてきたのである。このようにみると、その真否はともかくとして、朱印船貿易の話題はこんにちも鉾町のなかにいきのこつて、わたくしたちの心をつよくうごかしているのである。このごろの歴史の研究をふりかえてみると、政治・経済・文化という一口に云えば誰れでも否定できない相関関係が、案外におろそかになつていて、政治史家・経済史家・文化史家というように、

さらにその時代・事項という風に専門化の傾向が、ますますつよめられてきているように思える。そしてそのなかで貿易というような分野は、まったく経済史家のしかもごく少数の方に委ねられていて、歴史の本筋からは片すみに追いやられていたように思える。しかしよく考えてみると、この貿易という分野は日本のような島国で、大陸との交渉のはげしく、その影響をうけることの多いところの歴史では、もつと全体的に重要視する必要があるのではなからうか。そしてその貿易は国内の政治の状況や商業の発展に大きな原因をもつてはじまり、やがて文化の展開にもいちじるしい影響を与えるのがつねであつて、歴史を総合的に観察して行く上でも、きわめてたいせつな研究部門であると思う。しかしそれだけにこの貿易史の研究には、とくにひろい歴史的識見と緻密な考証、さらに充分な語学力を必要とするのであつて、誰れしも関心をもつべきでありながら、誰れでもなし得る領域ではなかつた。その意味でこの『朱印船貿易史の研究』の一書は、まことにその研究に人を得たといふべきであらう。

著者岩生成一博士は、昭和二年故黒板勝美博士に随つて朱印船の渡航先各地を实地に視察調査されたのをいとぐちに、国内史料をひろく渉猟されるのとはもとより、オランダ・イギリスにも留学して東印度会社の文書記録を閲覧されるなど、初稿いらい十年といわれるが、実は三十年間の研究の成果ともいふべきものを公開されたのである。ここにはおよそ朱印船貿易に関する一切の問題が、余すところなく懇切に解明されていると云つてよい。これに先立つ研究としては、著名な川島元治郎氏の著『朱印船貿易史』（大正十年）があ

るが、この研究が主として朱印船貿易家の系譜の闡明に目標をおいているのに対して、岩生博士の本書はその具体的実態を明らかにしたものとして調期的と云うべきであろう。これまですでに学術雑誌に部分的に発表されたものもあるが、こうして体系化されてみると、一段とその意義のふかめられたことを感ずる。

第一篇「序論」には、朱印船貿易発達の社会的諸条件と制度の源流より確立に至る概要を述べ、第二篇「朱印船の物的要素」において朱印状の形式・下附手続・法的効力・下附数、さらに朱印船の構造・渡航地・航海について説明され、第三篇「朱印船の人的要素」において朱印船貿易家、船長・航海士・客商・乗組員数などに論及、第四篇「朱印船の貿易」において貿易品・資本額・投資形態・貿易法とともに日本の対外貿易及び東亜国際貿易上における朱印船貿易の地位が解明され、第五篇「結論」において鎖国と朱印船貿易家の行末、オランダ商権の拡張を述べられている。

この目次の概要でも知られるように、その本論は朱印船貿易に関する制度的研究であつて、そこには実地調査によるふかい理解と、外国文書館の所蔵史料の駆使に無数の新知見が示されているのであるが、通読して興味をひかれるのは、そのような制度的研究からはみ出た部分のような気がする。たとえば朱印船貿易の創始にいたる歴史的社会的事情などは、序論において八つの条件として列挙的に説明されているにすぎないが、そのなかにふくまれる日明貿易の方向転換という問題などは、国内政治との関連においてもつと究明してほしい点であつた。また人的要素の部分において、その一として客商||便乗商人をとりあげられ、それが乗組員の八割強を占めてい

るという指摘には、更めて考えさせられるものがあつた。この客商が朱印船貿易家との間にどの程度の人的結合があつたか判らないが、これが経営の上にも大きな役割を果たしたとすると、これまでのように貿易家のみに重点をおいて朱印船を考えるのでは不充分で、この客商の内容がさらに究明される必要がある。

このように本書のなからくみ取れば、なおつくることを知らぬような問題が、豊かな示唆をもつて語られていると思う。しかし疑問がまつたわけではない。博士は朱印船制度の創設を秀吉の時、文禄元年とする通説を、史料のよわさから疑問をいだき、「文禄元年に朱印船制度存在せず」と頭註をもつて確言してられ、その後の研究者も多くこの説に従うようになって、このごろでは徳川氏の慶長七年が確立の年代となつているのである。しかし博士も指摘されているように、文禄二年には呂宋渡航の商船に免状の下附が提案されているのであるから、呂宋はそれ以後になつたとしても、他の地区において文禄元年に存在したという推定も可能ではなからうか。たしかに存在したという確証はないが、存在の伝承は認められるのである。それも最初に書いた祇園祭の鉦柱の話などのような三〇〇年後の伝説でなく、長崎荒木家の古文書というものによつて、一八世紀初頭の諸種の文献に書留められたものである。このような伝承的史料のなかにはもちろん若干の誤伝もあろうが、博士の挙げられた社会的諸条件からみても、秀吉時代に朱印船貿易を考へて少しも不思議ではなく、わたくしは文禄元年説を必ずしも否定できぬのではないか、さらに渡海に関してはむしろ文禄元年以前にまで源流を考へてもよいのではないかと今も思つているのである。このこ

とは客商の占める役割の大きさとにらみ合わせると、いつそう考究の余地があるように思える。

最後に、博士には『南洋日本町の研究』という本書に關係するこ
とふかい名著ものこされている。研究者のすくないこの方面の研究
にあつて、このように精彩ある基礎的研究を達成されたことをふ
かく慶祝したい。附録とされた五種の史料も容易に得難いものであ
るが、このような主要な史料を惜しみなく学界に提供されたことに
も、ふかい敬意を払うものである。

(A5版四八頁 昭和三三年四月弘文堂発行 定価九八〇円)

千家尊宣先生
還曆記念

神道論文集

柴 田 実

千家尊宣氏は皇室と並んでわが國最古の家系ともいふべき出雲國
造家の嫡流として、國學院大學に國史を修めて後、その家を嗣いで
出雲大社教の管長・教統に任じ、信徒の信望を一身に担うとともに、
また母校の教授・理事として後進の誘掖に當り、かたわら「神道學
會」を組織していわゆる「前むきの神道」を鼓吹されつつある斯道
の重鎮である。昨年九月その還曆に當つて記念のため、知友・門下
四十余名から氏に贈られた本論文集は、今日神道研究の第一線にあ

るほとんどすべての人びとを網羅し、その意味で現今の神道學界の
全貌をさながら表明するが如き観ある書物である。もつともA5判
全冊九三七頁にも及ぶ巨篇ながら、寄稿の各論文は一篇平均二十頁
そこそこであつて、広範な問題を論じ、深遠の論議をつくすには適し
ないため、おのずからいわば手ごろな論題に限られているのは、こ
種の論文集の常として己むをえないところであつて、中にはとく
に研究論文というに値しない一種の所感文のごときものも若干混じ
ているのもあるいは恕すべきであるやも知れない。従つて今、その
中比較的主要な論文のみを選んで、その論旨の概要を紹介し、若干
の所見を述べたい。

さて本書は神道學の問題、出雲大社・出雲および桐廬舎千家尊宣
先生を語る、の三部に分たれているが、まず第一部において

肥後和男・鎮魂の儀について 伴信友の鎮魂伝の所説を一応参考
にしつつ、この古い呪術の本源の形式とその意味とを探らうとした
もの。それは今日までの解説ではもつぱら宮中において行われたも
のとされているが、より古くは恐らく一般の人びとの上にも行われ
たものであらうとして、沖繩におけるマブイの慣習を参考し、それ
が古代における巫女一般のわざであつたことから、旧事本紀にいう
ところ、物部氏の祖がはじめて鎮魂祭を行つたとする所説を批判し
て、物部氏は古くから政治・軍事の方面において顕われているが本
來は呪術の家柄であつたところから平安時代に至つて齋部氏等に対
抗して、自己主張を試みたものであつて、鎮魂の儀は天鈿女命の遺
跡だとする古語拾遺の所伝の方が信用するに足ると論ぜられる。そ
して最後にそのような一般的な鎮魂が後代宮中を除いてほとんど行